

二〇一一年度大学入試センター試験 解説 〈現代文〉

第1問 評論 鷺田清一「身ぶりの消失」による

〔総括〕

人間の身体と空間の関係について論じた文章。昨年より文章量はやや増加したが、頻出著者・テーマであり、受験生としては読みなれた内容のものであった。途中に引用文を含むスタイルもセンター評論では頻出の形といえる。

設問別では、問1の漢字が難化した。「举措」や「更地」など、受験生にとつてはあまり馴染みがない漢字が問われており、漢字力の差がはっきり出る問題だ。問2～4は、二択まではすぐに絞れるが、最終的に正解するためには正確な読解力が必要な問題。指示語を押さえ、価値観を判定し、筆者の主張を追うという現代文読解の基本を押さえた問題といえる。特に問3はやや難のレベル。問5は特に迷う選択肢はなく、基本レベル。問6の「文章の表現」を問う問題は二つの小問で構成されているが、これは昨年同様の形式であり、特に戸惑った受験生はいなかったはずだ。ただし、(ii)のほうは紛らわしい選択肢があるので選択肢の内容を緻密に分析する必要がある、やや難しい。問6は「国語表現」に関わる分野を重視する傾向の表れであり、今後もこうした出題傾向が続くものと予想される。

〔解説〕

問1 漢字問題

受験生の漢字力の有無が問われるレベルの漢字が並んだ。「举措」や「更地」など、自力では書きづらい漢字がいくつかあるはずで、その場合、文脈を踏まえた判断と、選択肢を「消去法」で落として正解にたどりつくという解法技術が必要になる。いずれにせよ、日頃から漢字に関して多角的な勉強を積み重ねておくことが望ましい。

- | | | | | | |
|--------|--------|--------|-------|--------|--------|
| (ア) 举措 | ① 準拠 | ② 去就 | ③ 特許 | ④ 虚実 | ◎ ⑤ 暴挙 |
| (イ) 塊 | ① 氷解 | ② 奇怪 | ③ 皆目 | ◎ ④ 団塊 | ⑤ 懐古 |
| (ウ) 更地 | ① 晴耕雨読 | ◎ ② 更迭 | ③ 恒久的 | ④ 厚遇 | ⑤ 強硬 |
| (エ) 充満 | ① 銃口 | ② 柔軟 | ③ 追従 | ◎ ④ 拡充 | ⑤ 縦横 |

- (オ) 家計簿 ①原簿 ②規模 ③思慕 ④応募 ⑤墓碑銘
- 正解 (ア) 1 2 3 4 5
- (イ) 2 4 (ウ) 3 (エ) 4 (オ) 5
- (各2点)

問2 基本

傍線部A「からだが家のなかにある、というのとはそういうことだ」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選び。

まず、傍線部中に「そういう」という指示語があるので、「そういう」が指し示す内容を本文に求めると、「これはからだで憶おぼえているふるまいである。からだはひとりですんなふうに動いてしまう」という直前の箇所であることがわかる。この部分にも「これ」や「そんなふうに」という指示語があり、また傍線部の2行前に「だから」と因果関係を示す接続語もあるので、段落全体を因果関係と指示語でとらえていけば正解にたどりつけることがわかる。

●傍線部Aにいたる流れ

原因

だから

結果

これ。そんなふうにし。

傍線部A「からだがしそういうことだ」

この流れをつかんだうえで選択肢を見ると、文意を正確に説明しているのは⑤であることがわかる。特に決定的なのが⑤の中の「みずからの身体からだの記憶に促されることであるまいを決定している」という箇所。これは本文で指示されている内容の「からだで憶おぼえているふるまいである」の言い換えになっている。

他の選択肢で該当する箇所の説明を見ると、①「身体が侵蝕されている」、②「人間の身体は完全に支配されている」、③「人間の身体は新しい空間に適応し続けている」、④「ふるまいを自発的に選択できている」となっており、いずれも×。

また、「だから」の直前に書かれている「他のひとたちを見下ろすことは『風』に反する」という内容の説明としても⑤の「その空間にいるひとび

と互いに関係しながら」だけが正しい説明になっている。同じ空間を共有している場合、相手との関係を無視してひとり見下ろす姿勢をとり続けることは「風」に反するという事だ。

他の選択肢で、人間の身体がその空間にいるひとびとの関係において成り立っていると書かれているものがない点でも⑤を選ぶことは容易なはずだ。因果関係と指示語に着目して解く、というセンター評論の典型的な問題といえる。

正解 6 ⑤ (8点)

問3 やや難

傍線部B「空間がそこで行われるだろうことに対して先回りしてしまっはいけない」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを選べ。

まず傍線部の内容を理解することが大切になる。そのために、傍線部Bの直後の「というわけだ」という表現から、傍線部Bが直前の言い換えになっていることをつかむ。また、その言い換え自体が「つまりは」でまとめられた抽象的なもので、「前者」||「原っぱ」の具体的な説明をそれより前に求めていけば解答の根拠が見つかる。

ここでは、「遊園地」がどういうものかの説明も大切だが、それ以上に「原っぱ」がどういう意味をもつ空間であるかをとらえることが大切になってくる。

●傍線部Bにいたる流れ

「遊園地」と「原っぱ」の具体的な説明。

←

そして前者(||「原っぱ」)の建築理念、つまりは、特定の行為のための空間を作るのではなく、行為と行為をつなぐものそれ自体をデザインするよ
うな建築を志す。

≡

傍線部B「空間がそこで行われるだろうことに対して先回りしてしまっはいけない」というわけだ。

次に、直前の内容が対比的な価値観を示したものであることをつかもう。

特定の行為のための空間を作る（マイナス）≠「遊園地」
のではなく、

行為と行為をつなぐものそれ自体をデザインするような建築（プラス）≠「原っぱ」

● 「Aではなく、B」パターン

Aが筆者の否定する価値観（マイナス）をもつ内容であり、「ではなく」を挟んでBに筆者の主張する価値観（プラス）をもつ内容がくる。

この内容がつかめれば、傍線部Bの「空間がそこで行われるだろうこと」というのは「行為と行為をつなぐもの（≠原っぱ）」のことであり、「先回りしてしまう」というのは「特定の行為のための空間を作る（≠遊園地）」ことだとわかる。要するに空間的には「原っぱ」が大切なのであって、「遊園地」を作ってはいけない、ということを行っているのだ。

これだとまだ抽象的すぎるので、「前者」≡「原っぱ」の具体的な説明を傍線部の一つ前の段落に求めると、「たまたま居合わせた子どもたちの行為の糸がたがい絡まりあい、縺りあわされるなかで、空間の『中身』が形をもち始める」の箇所が見つかる。これらの内容は選択肢の④と完全に一致していることがわかる。

特定の行為のための空間を作る

≡

④の前半、「遊園地」の説明……その場所で行われる行為を想定して設計された空間

⇔

たまたま居合わせた子どもたちの行為の糸がたがい絡まりあい、縺りあわされるなかで、空間の『中身』が形をもち始める

≡

④の後半、「原っぱ」の説明……行為相互の偶発的な関係から空間の予想外の使い方が生み出され（る場所）

この設問は、センター評論で最頻出の「対比構造」を理解して解く問題なので、是非本文から読み取れる力を付けて正解してほしい。他の選択肢では、「遊園地」と「原っぱ」の対比的な内容についての説明にそれぞれ間違いがある。

①と②は「原っぱ」の説明が間違っているが、それ以上に「原っぱ」をマイナス的な価値観で説明している点が致命的なミスで×。③はやや迷うが、「遊園地」が「規則に従う」ことで「行為が事前に制限され」「主体性が損なわれ」という説明は本文には書かれていないので×。⑤の「遊園地」の説明は完全に間違っているので×。

正解 7 ④ (8点)

問4 標準

傍線部C「高齢者たちが住みつこうとしているこの空間には『文化』がある」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

この問題も問2と同じで、まずは「指示語」に着目することが大切。

●傍線部中、あるいは傍線部の直前に指示語がある場合、まずは指示語問題として解く。

これはセンター現代文に限らず、どの大学の現代文でも大切な解法の鉄則だ。ここでは、傍線部の直前に「そのかぎりで」とあるのを見落とさないことが大切になる。

●傍線部の直前の指示語が指し示す内容

青木はいう。「文化というのは、すでにそこにあるモノと人の関係が、それをとりあえずは結びつけていた機能以上に成熟し、今度はその関係から新たな機能を探る段階のことではないか」と。

＝
そのかぎりだ 傍線部C

つまり、傍線部中の「文化」は、青木氏のいうところの「文化」の定義にのっとったものだとわかる。それは文中で、「文化というのは、すでにそこにあるモノと人の関係が、それをとりあえずは結びつけていた機能以上に成熟し、今度はその関係から新たな機能を探る段階のことではないか」という定義で説明されている。

また、もう少し戻ると筆者自身の言葉でこう書かれている。「からだと物や空間とのたがいに浸透しあう関係のなかで、別のひととの暮らしへと空間自体が編みなおされようとしている」。

まとめると、傍線部中の「文化」は次のように定義できる。

● 「文化」Ⅱからだと物や空間の関係とがたがいに浸透しあう関係のなかで、別のひととの関係において新たな機能を探る段階のもの、あるいは空間自体が編みなおされようとしているもの。

これらの箇所を根拠にして選択肢を見ると、最終的な結論が「新たな暮らしを築くことができる」となっている③が正解とわかる。また、③の「身に付いたふるまいを残しつつ」「他者との出会いに触発されて」という説明も、さきほどまとめた「文化」の定義と合致する。

他の選択肢の結論部分をあげると、①「伝統的な暮らしを取り戻す」、②「快適な生活が約束されている」、④「身に付けてきた暮らしの知恵を生かすように暮らす」、⑤「個々の趣味に合った生活を送る」となっており、いずれも×。

正解 8 ③ (8点)

問5 基本

傍線部D「行為と行為をつなくこの空間の密度を下けているのが、現在の住宅である」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを選べ。

傍線部は「現在の住宅」についての説明なので、かつての住宅ではなく、現在の住宅についての説明を本文に求めると、傍線部を含む最終段落の冒頭からの内容を理解すればよいことがわかる。ただし、現在の住宅になる以前の住宅がどのようなものであったかを理解することも必要で、そのためにはもう一つ手前の段落も正確に読み取る必要がある。

まず、「現在の住宅」の特徴は、「目的によって仕切られてしまった」ことであり、それにもなつて「ふるまいも切り分けられ」てしまった。これ

が「空間の密度を下げている」状態のことだ。

一方、かつての住宅では「複数の異なる行為がいわば同時並行でおこなわれ」ており、これが「住宅という空間を濃くしている」と書かれている。そうした空間密度の「対比」を理解したうえで選択肢を見ると、①の内容が正しい説明になっていることがわかる。

②は、空間の独立性が高まり、人と人との関係が低下したことについて触れているのはいいとしても、「複数の異なる行為」が同時並行で行われることで空間密度が濃くなっていることの説明がないので×。傍線部は「行為」について書かれている箇所であることを見落とさないこと。③は「空間の慣習的な使用規則に縛られない設計がなされており」が×。④はかつての木造建築についての説明も、現代の住宅の説明も間違っている。⑤は「現在の住宅では、予想外の行為によって空間の用途を多様にするのが困難になっている」が×。本文にはまったく書かれていない内容だ。

正解 9 ① (8点)

問6 (i)基本 (ii)標準

(i) 波線部Xの表現効果を説明するものとして最も適当なものを選び。

問6の「文章の表現」を問う問題は、昨年引き続き二つの小間で構成されている。昨年の(i)ではダッシュ記号「――」の「効果」が問われていたが、今年も「『中身』？」と、筆者が問い直している箇所に波線が引かれ、その表現効果が問われている。

こうした問題は、筆者の主張を問うものではないので本文中に根拠を読み取ることは難しい。選択肢の内容を検討し、×が付いたものを落としていく「消去法」で対処していこう。

①は「問題点を整理し」「新たな仮説を立てよう」の部分が本文の展開からは読み取れず×。②は「これまでの論を修正する契機」とあるが、論を修正している内容は書かれていないので×。③は「行き詰った議論を打開する」「話題を転換」とあるが、本文では特に議論が行き詰っているわけもなく、また次の青木氏の論の引用は引き続き「中身」という言葉についてのものであり、「話題を転換」しているわけでもないので×。残った④の「あえて疑問を装うことで立ち止まり、さらに内容を深める新たな展開に読者を誘導する効果がある」は、その後の青木氏の引用にはじまる論の展開の説明として正しいのでこれが正解。

(ii) 筆者は論を進める上で青木淳の建築論をどのように用いているか。その説明として最も適当なものを選び。

これもさきほどの問題と同様「消去法」で解いていこう。まず、(i)でも見たように青木氏の建築論は筆者の論を深めるために引用されているので、

①の「異を唱え」、④の「批判的に検証」は×。

②は、「青木の建築論の背景にある考え方を例に用いて」とあるが、筆者が青木氏の引用を通じてその「背景にある考え方」について触れている箇所は本文からは読み取れない。筆者はあくまで青木氏の建築論の引用に徹しているものであり、それは③のように筆者の主張に説得力をもたらすための「援用」といえる。

また、筆者が現代の「暮らし」の空間を批判している面はあるにしても、それが青木氏の建築論の引用の目的ではなく、「空間の編みなおしという知見を提示」するために引用したとする③が正しい説明といえる。

正解 (i) ④ (ii) ③ (各4点)

第2問 小説

加藤幸子「海辺暮らし」

〔総括〕

出典は、一九八二年下半期（一九八三年一月）、「夢の壁」で芥川賞を受賞した加藤幸子の「海辺暮らし」。

前半は、干潟に住む一人暮らしのお治婆さんはるまと家の立ち退きを求める市役所の担当者である梶氏かじとの駆け引きが描かれる。お治婆さんはまったく立ち退くつもりはないのだが表面的にはそれを出さない。初めて会う梶氏とお治婆さんとの駆け引きが、ユーモアを交えた会話のやりとりや表情の変化などを通じて巧みに描かれている。

後半、耳が聞こえなくなったお治婆さん（芝居かもしれないが）のシーンからは、一転して死を暗示させるイメージを伴った幻想的な描写となり、最後に猫のルルの不可思議な動作なども描かれ、理解しにくい内容になっている。この後半に関する問いの出来がポイントになったと思われる。

問1の語句の意味内容を問う問題は例年と同じ形式だが、難易度的に今年は易しく、文脈にあてはめて考えればそれほど迷うことはなかったはずだ。問2は、本文の描写を正確に押さえた上で、慎重に選択肢を吟味する必要がある。問3は、傍線部にいたるお治婆さんと梶氏とのやり取りを読み取れば解ける問題。問4は、会話の中にお治婆さんの「皮肉」が込められているのを読み取れるかどうかのポイント。問5は、読み取りにくくなった後半の情景描写に託された象徴的な意味を読み取る問題で、かなり難しい。前半との落差についていけたかどうか。問6は、文章の叙述に関する問題で、二つの正解のうち一つは選びやすいが、後半部分に関する正しい説明としてもう一つをどれに絞るかで迷ったはずだ。

問1 語句問題

語句は三つとも慣用表現で、「本文中における意味」を問う問題ではあるが、あくまで「辞書的な意味を優先して解く」というのは例年通りの鉄則パターン。今年の問題に限らず、こうした慣用表現には日ごろからいろいろな媒体を通して慣れ親しんでおき、語彙力を増強してほしい。今年是比较的易しい語句が並んだので、文脈に戻して判断しても全部正解できるレベルのものだった。

(ア)の「つくづく」とは、④「注意深くじっくり」とが正解。本文に戻して入れてみても問題なく意味が通る。

(イ)の「躍起になって」は、⑤「むきになって」が正解。これはできれば辞書に載っている意味を知ってほしい問題。

(ウ)の「頓狂な声」は、②「あわてて調子はずれになっていく声」が正解。これは「すつ頓狂」という強調された表現でよく使うので、聞いたことがあるはず。文脈判断的にも正解できるはずだ。

正解 (ア) 12 (イ) 13 (ウ) 14 (各3点)

問2
標準

傍線部A「教育のしがいもあるというものだ」とあるが、このときのお治婆さんの心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを選べ。

心情問題だけに、小説の場面や状況、人物関係などをしっかり把握してから解答するようにしたい。その場合前書きも重要なヒントになるので、前書きに書かれている場面や状況、人物関係などを整理して自分の頭の中に小説世界を想像し終わってから本文に入るようにするのがコツだ。また、ここでは「教育のしがいもあるというものだ」という語句に込められたお治婆さんの心情をどう読み取るかがポイント。

まず、初めて訪ねてきた市役所の職員である梶氏に対してお治婆さんがどのような印象を持ったかを押さえると、「びくともした様子はない」「ちよつと感心した」「壮健そうな働き盛りである」などが見つかる。そこで選択肢を見ると、①の「実直だが真面目過ぎる」、③の「信頼できる人」、⑤の「役人としての能力の高さが認められる」という要素は本文からは読み取れないので×できる。

また、②の「初めて見るであろう陋屋」という表現も、梶氏が初めて見たかどうかについての記述は本文になく、「まれにみる」とは書いてあるが、△が精一杯。結局④の「初めての訪問にもかかわらず臆する気配を見せない様子から梶氏を頑強そうな人だと思ひ」だけが本文を正確にとらえていることになる。

●心情が問われる問題でも、まずは客観的な要素（状況や場面設定・人物関係・人物や風景描写など）を本文で押さえ、それらが矛盾している要素を含む選択肢を消去する。

つぎに選択肢の後半の要素の確認をしておこう。

まず、③「この人なら～期待している」、⑤「家を手放すつもりはない～理解させることができるはずだと奮い立っている」はお治婆さんの心情説明としては完全に間違いで×。

①の「現実には～手ぐすねを引いている」はやや強すぎる表現だが、これだけでは×できない。ただし、前半が×なので①はすでに消去できている。

②の「立ち退きを求めるためには役人としてどう振る舞えばよいかをわからせてやろうと意気込んでいる」は、立ち退くつもりのないお治婆さんが、立ち退かせるためのワザを相手に指南することになってしまい矛盾するので×。

残った④は、

④ 役所の言いなりにはならないこちらの対応のしかたを知らしめる相手として不足はないと楽しみにしている。

≡

教育のしがいもあるというものだ

という対応関係になり、「教育のしがいもあるというものだ」に込められたお治婆さんの心情の説明として問題なく、これが正解。このあと、梶氏に對して皮肉も交えたユーモアたっぷりのお治婆さんの対応が続くので、「楽しみにしている」という説明もOKだ。

正解

15

④

(7点)

問3 基本

傍線部B「新任の『市役所』の顔色が変わった」とあるが、それはなぜか。最も適当なものを選び。

理由説明問題の場合、結果にいたる原因の箇所を正確にとらえるのが大前提になる。因果関係には大きく言って次の二つのパターンがある。

● 因果関係

- ① 原因→結果 いわゆる順接の関係で、評論では「したがって」「だから」などの接続語で結ばれる場合が多い。
- ② 結果→理由説明 先に結果を述べておき、後で「なぜなら〜だから」という形で説明するもの。

今回の傍線部Bにいたる原因が何かを本文から読み取ると、「新任の『市役所』の顔色が変わった」原因は手前に書かれていることがわかるので、それを丁寧に拾っていくと、選択肢①の流れが適切な説明であることがわかる。

本文……「ごぞんじないんですか。この干潟の水の測定値はBOD14PPMです」

選択肢①の要素……勢いこんで口にした、工場から出される煙や水に注意を促した言葉

←

本文……「さつそく立札たてふだを立てなくっちゃ。『工場からドクが出ています。貝を採らないでください』って」

選択肢①の要素……工場からドクが出てると書かれた立札を実際に立てる行動にお治婆さんを誘いかねない

←

傍線部B……「新任の『市役所』の顔色が変わった」

選択肢①の要素……驚き、うろたえた

他の選択肢で、右の流れをつかんでいるものはない。②の「あまりにも独善的なので」、③の「責任を感じ」、④の「警戒して訪問すると」「ずうずうしさに憤りを覚えた」、⑤の「良心の呵責かじやくを感じさせてしまったことを気の毒に感じた」等の説明は、本文に書かれている内容を押さえていないのですべて×。

●本文に書かれていない、あるいは対応する表現がない場合は×になるのが鉄則。

というセンター現代文の鉄則を確認しておこう。

正解

16

①

(8点)

問4 標準

傍線部C「アナタノ楽シイオ話ヲモット聞キタイノデスガ、残念デス」とあるが、この部分の説明として最も適当なものを選べ。

突然カタカナ交じりの会話文になったので驚いた受験生もいたかもしれないが、これはお治婆さんの耳が遠くなってしまい、相手の会話が聞き取れなくなってしまうことからくる表現であるとともに、立ち退きを迫る市役所職員の梶氏に対して、お治婆さんが抵抗姿勢を示したものであることを読み取りたい。

こうした小説中の「表現」に関する説明を求める問題は、本文中に解答の根拠がない場合が多く、その場合は選択肢の内容を比較しながら正解を探していく。たとえば、「比喩」「擬人法」「象徴表現」などが本文で使われている場合は、選択肢中にそうした説明があるところから本文に戻り、その説明が正しいかどうかを判断していくことになる。

今回の話の流れは、お治婆さんの耳が突然聞こえなくなり、「金属的な音声」によって梶氏と会話することになった、というのだが、本当にお治婆さんの耳は突然聞こえなくなったのだろうか？ これはおそらく仮病である可能性が高い。なぜ、そんな仮病を使ったのだろうか？

そして、カタカナで書かれているお治婆さんの言葉はいかにも丁寧であるが、立ち退きを要求する相手に対してここまで丁寧であるのは一種「殷勤無礼（いんぎんぶれい）」うわべは丁寧に見せかけて実は尊大であること」な態度であり、皮肉たっぷりな対応といわざるをえない。事実、そうしたお治婆さんの対応に「虚しい努力の末に、梶氏は落胆しきって」帰ってしまうのだから、お治婆さんの完全勝利といえる。

そうした説明になっている選択肢は④であり、これが正解。先ほども書いたが、こうした表現についての説明問題は、まず選択肢を見て、何が求められているかを類推していくやり方が正しい。

①から⑤までの選択肢では、①「梶氏を責める気持ち」「市役所の担当者と対等に渡り合おうとするお治婆さんの気丈さ」、②「市役所の担当者とかかわり合うことを諦める気持ち」「梶氏を教育する気力が失せている」、③「切ない心情」「孤独な思いを解消しようと願っている」、⑤「そもそも梶氏とは会話を交わしたくなかった」等の要素を本文と対照し、正誤を判断していく。そして、この傍線部の説明としてはこれらの要素は不適切であると判断し、×して消去する。

一方、正解の④では、「市役所の担当者に対する皮肉が込められており」「梶氏をやりすぎそうとするお治婆さんの賢さ」という説明になっており、これが正しい説明だと判断できる。

正解 17 ④ (8点)

問5 やや難

20ページの空白行より後の84～106行目の部分はどのような意味を持っているか。その説明として最も適当なものを選べ。

例年ならば傍線部Dが本文に引かれており、それについて問題が問われるところだが、今年是新傾向ともいえる問題が出題された。前書きにあるように、本文の上に行数が示されており、「84～106行目の部分」に関しての意味を問うているのがこの問題だ。

おそらく多くの受験生が一度小説を最後まで読み、この設問の指示に従ってもう一度84行目に戻って最後まで読み直したと思われる。しかし、この後半部分は前半とちがって非常に読み取りにくい。情景描写に託された象徴的な意味を理解することが要求されているからだ。

本文を正確に追って読んでいくと、太陽や空気がそしてウミネコやアオサギなどの動物の描写が続く中に、亡くなった夫の「源さん」の「骨壺」の話や「死んだ空」など、「死」をイメージする描写がちりばめられていることがわかる。また、最後に猫のルルの不可思議な動作が描かれる。

こうした内容を持つ箇所の説明として、どの選択肢が正しいかだが、さきほどの問4以上に「選択肢の内容の吟味」が必要になる。ここは「消去法」で対処していこう。

①の「干潟に生息する生き物を救おうとして生きてきた」はいいとしても、「お治婆さんの様子が情緒的に描かれている」の箇所が×。この部分はやや幻想的・暗示的な描き方ではあるが、「情緒的」とはいえない。

②の前半はいいのだが、後半の「お治婆さんの今後の生き方が間接的に描かれている」の箇所が×。「84～106行目の部分」の描写の中に、特に「お治婆さんの今後の生き方が間接的に描かれている」箇所は見つからない。

③は「人間の営みとはかわりなく生き物たちが淘汰たうたされていく」「過酷な自然のありよう」が×。あくまでお治婆さんが主体であることを見落とさないことだ。

④の「工場の停止が干潟の生き物たちに安堵あんどをもたらした」という説明も本文からは読み取れないので×。

正解は⑤。「死を連想させる要素」「お治婆さんの身に起こるであろう事態が暗示的に描かれている」という説明もぴったりくる。

正解 18 ⑤ (8点)

問6 標準～やや難

この文章中の叙述に対する説明として適当なものを二つ選べ。

新課程になってから、小説の最後の問題はこうした「叙述の説明」や「表現の特徴」について問うものが連続して出題されている。また昨年同様、今年も正解を「二つ」選ぶ形式になっている。

解法としては、選択肢を要素に分けて○×を付け、基本的に消去法で解くのが確実。また、選択肢同士を比較して解くという視点も有効だ。一つずつ選択肢を見ていこう。

①は、後半の「梶氏が立派な体格をしたヒーロー的な存在である」が×。本文にはそうした表現は書かれていない。

②では、梶氏を「市役所」と呼ぶことを「擬人法」と説明しているが、正確にはこれはお治婆さんから見ると梶氏という人物の人格を否定した結果の呼び方であり、そこには立ち退きを要求する市役所のお役人に対するお治婆さんの皮肉が込められている。その意味で、「公害対策に日々奔走する役人であることを強調」という説明も間違っている。

③は正しい説明になっている。「おばあちゃん」と呼んだのでは親しみのある間柄になってしまうので、公的な立場から「元木治さん」と呼んだの

である。これが一つ目の正解。

④は、「梶氏が責めを負わせられる側」「お治婆さんが責める側」という関係と書いてあるが、二人の関係は責める・責められるという対立関係で説明できるものではない。梶氏は市役所の担当者としてお治婆さんに立ち退きをお願いしにきているのであり、お治婆さんはそれを頑として拒んでいくに過ぎない。

⑤は二つ目の正解。この選択肢は実は、次の⑥が消去法で×になることで、残っている選択肢が⑤しかないところから正解とわかるもの。内容的には特に×が付かないのでひとまず残しておき、次の⑥が×になることを確認して二つ目の正解として⑤を選ぶ、という手順を取ってほしい。

●「叙述の説明」や「表現の特徴」で二つの正解を選ぶ場合、一つはすぐに正解とわかる場合が多く、もう一つの正解はすべての選択肢を消去法で確認した後、残ったものを選ぶという手順を取る。

⑥は「莊厳でありながら耽美的な雰囲気を生じさせている」とあるが、この箇所の描写には絵画的な印象は感じられても、それは「莊厳」「耽美的」なものとはいえないので×。

正解 19・20 ③・⑤ (順不同) (各5点)